

アイヌ語地名「陸別」

横 平 弘*

1. はじめに

地名の研究が盛んになっている折柄、「陸別」の旧地名に使用されていた「溼」「溼」についての文字論争を最近の新聞紙上で目にしたので、この論争を契機にして文字、発音などの観点から、この地名について考えてみた。

2. 「陸別」の語源・語義

まず身近にある資料に基き、「陸別」の語源、語義などを探り、年代順に記しておく。

(1) 北海道蝦夷語地名解 (永田方正：1891)⁽⁶⁾

Ri kun pet リクンペツ 高危川○溼別村

(2) 地名アイヌ語小辞典 (知里真志保：1956)⁽⁴⁾

rik-un リクン 高い所にある；上の。

く"く" にアクセントあり

(3) アイヌ語地名解 (更科源蔵：1966)⁽³⁾

陸別 (りくべつ)

足寄郡陸別町。池北線陸別駅、もとは溼別とかき、「りくべつ」と呼んだ。市街の下流で利別川に合流する陸別川の名が地名のはじまり。アイヌ語のリクン・ペツは高く上って行く川の意。アイヌは川は山の方へあがって行くものと考えていた。

(4) 北海道の地名 (山田秀三：1984)⁽¹⁰⁾

陸別。利別川を北に溯って、北見国境の山裾まで来た処に陸別市街がある。こんな山中によくこれだけの街ができたと思うような処である。ここで網走川境の高い処から西流して来た陸別川が本流に注いでいる。陸別町は本流の源流部と陸別川筋を含む山間の土地である。

永田地名解は「リ・クン・ペツrik-un-pet (高危川) と妙な解を書いた。永田氏は時々、クンという音に「危い」という解をつけているのであるが、そんな語義が果してあったのであろう

か？陸別の旧名リクンペツの語義は、リク・ウン・ペツ (rik-un-pet 高い所・にある、または、に入っている・川) であったろう。太平洋側とオホーツク海側の分水線である高い山並みの間を東西に流れている川なのであった。溯って行くくと網走との境の伊由谷岳の高い山列の中に入っている。

(5) アイヌ語地名の研究 2 (山田秀三：1983)⁽⁹⁾

〔駅名の起源〕

アイヌ語リクン・ペツ (高く上っていく・川) から採ったもので、陸別川がこの付近でけわしくなり、川が水源に向って急に高く上ってゆくからである。

リクン (rik-un) は、普通、「高处に・ある→高い」と解されるが、川の水源地にに使われる場合には、「高处に・入っている」のような意味あいを持っているようである。なお、陸別の陸は、20年ぐらい前まではこざと偏でなく、さんずいをつけた珍しい字を使っていた。

3. 「消えた文字」論争

次に陸別の旧地名「溼別」「溼別」の「溼」「溼」の2文字について投稿された掲載文の中の必要部分を抜書きする。

(1) 「消えた文字」武田信義 (旭川アララギ会主宰者)

“…… (前略) …… 「陸別」の文字は私が初めて目にした時は「溼別」であった。…… (中略) ……

明治4年 (1871年) 4月4日に戸籍法が発令された時、アイヌにも和人と同じように氏名を付けることが決まった。それを手がかりに調査を進めたら「リクンペツ」という地名をそのまま苗字にした「溼別相助」が見つかった。当時は釧路国の管轄だから住所は釧路国足寄郡溼別村平尾になっている。…… (中略) ……

* 道都短期大学

やがて「溼別」の開祖といわれる関寛翁が明治35年に入植し、43年になると鉄道が開通して駅名に使われた。ただしこの時は「溼別」であったという。この「溼」が「溼」に変わったのは大正年代に入るのと同様ぐらいである。こうして「溼別」の活字が出来、公文書に正式に使われたのである。

私の手もとに重野安繹が撰した「字林集成」という辞書がある。「本書載スル所の文字殆んど六萬」と跋文にある大著だが、この中に「溼」も「溼」もない。これは明らかに漢字ではないことを示している。

そこで私は国字だけを集めた菅原義三著の「小学国字考」改定版を開いてみた。889字を丹念に探して拾った珍本である。当然のようにこちらにも載っていなかった。……（後略）……”（1987. 3. 10 北海道新聞夕刊）

(2) 「溼」「溼」は漢字 武田氏の「消えた文字」に反論 加藤 敏洋（小樽在住）

「武田信義氏の「消えた文字」（10日付文化欄）を読んで大いに気になった。……（中略）……

手元の諸橋轍次の「大漢和辞典」の索引で「リク」という音のところで調べてみると「溼」も「溼」もちゃんと存在していた。早速本文の方に当たってみると次の様である。

「溼」「リク、ロク」ゆき、凝雨也。

「溼」「リク、ロク」 1) みぞれのうるほひ。

2) 澤の名。

……（中略）……陸別がどんな所かまるで見当がつかない。もう一度「消えた文字」の文を読んでみる。陸別は北海道の東部に位置した十勝国に属し、「いまでは日本一寒い所」として知られるようになったと書いてある。試みに山田秀三「北海道の地名」を開く。

……（中略，上記2. 4）に記載の前半文）……

要するに陸別は冬は厳しい清冽（せいれつ）な水の豊富な谷間の土地なのであろう。これは文字通り「溼」であり「溼」である。間違いなく「溼」「溼」の文字を陸別の旧名「リ・クン・ベツ」に当てはめた人の意識の奥に、これらの気候や地形が存していたのであろう。大漢和には「リク」の音を持つもの61を数えるが、「溼」と「溼」との2字が選ばれた主因はこんなところと推察する。

……（中略）……

幕末から明治のはじめを生きただれかがリ・クン・ベツの「リク」と音を同じくする文字を、あまたある漢字の中から選び出し、その義がリ・クン・ベツの地形や気候を余すところなく表している2つの文字に託したのであろう。「溼」と「溼」の2つの文字の内にその時代を生きただれかの心の凝縮を見る。

……（中略）……そして翻って昨今の安易な地名町名の変更を憤る。地名や町名などを決めたり変更したりするのはどこの役所の何という課がつかさどっているものか寡聞にして知らない。もし知っていたところでどうにもならないであろう。……（後略）……”（1987. 3. 18 北海道新聞夕刊）

4. 地名の文字表記

鏡味明克（1984）は地名を文字表記の上から類型化し、その1つに「借音地名」と称して次のようにのべている。⁽¹⁾

「古代には『延喜式』（民部式）で、「二字ヲ用イ、必ズ嘉名ヲ取レ」といっているように、意味にかかわりなくよい字のあて字をすること、短い地名も長い地名も2字で表わすように国策として行われたから、「武蔵」のように、はみ出す音に漢字をあてなかったもの、「紀伊」のように足りないところに字をつけたしたものなどがあり、また、「信濃」のように、シンの漢字音をシナに転用（このことを論じたのが本居宜長の『地名字音転用例』である。）したものなどがある。この例は、シナがシナに音変化したのではなく、もともとシナ～の地名にシンの字音字を転用したものである。”

アイヌ語地名の漢字表記にもこのような例が数多くみられる。

鏡味明克（1985）は「漢字の功罪」と題して、「釧路も『万葉集』（巻1）に「くしろ着く手節の崎」とよまれたような、古代の、ひじに巻きつける飾りの腕輪のような「釧」の古語を利用してゐる。”と解いた上で、安易な古語の利用を戒めている。⁽²⁾

それ故に釧路は古語の「釧」に「路」を無理に結びつけて表記したものであるから、正しい読みは「くしろろ」というべきところであるが、釧路は知名度も高く、「くしろ」の呼称は当初に定着したようである。しかし、これを語構成からみるな

らば、「釧」「路」の組合わせに基いて「くし」「ろ」となることから、「釧」は「くしろ」から「くし」に字音字を転用したとみることができ。従って、ふりがなは「釧・路」とつけるべきである。

5. 古地名「リクンベツ」の漢字表記

さて、「リクンベツ」の漢字表記であるが、これを2文字で表記するのは極めて困難であったと考えられる。

「ベツ」は当然「別」となるから、残る「リクン」を1字で表わすこととなり、その表記漢字として「陸」「漚」「漚」が有力候補になったと推察される。しかし「陸」は一般になじみがあって、その読みは「リク」として定着しているために、これを「リクン」と読ませるには抵抗があることから捨てられて、「漚」と「漚」が残されたのであろう。しかもこの2字は字型、語義が類似していることから、いずれとも決めがたく、当初は併用されたのではなかろうか。しかし改めて考えれば、漢字「ン」には「凍」の如く、凍るほどに冷たい語義があって、その程度は「シ」よりも強烈であることから、もし加藤敏洋氏が記されたように陸別の気候、地形を考慮したとするならば、この土地には「漚」よりも「漚」の方がふさわしいと思われ、従って「漚」のみが表記文字として選定されるはずであったと推察される。(気候を考慮した表記の好例としては「和寒」「霧多布」がある。)

その後、公式使用文字として「漚」が採用されたのであろう。しかし30余年前(昭和30年頃)にいたり、使用漢字の制限によって「漚」に近い「陸」に書換えられ、読みも「陸」の字面に引きずられて「リクン」から「リク」へ読換えられてしまった。つまり地名表記の当初に懸念されたことが現実となり、今では「リクンベツ」の呼称は聞かれなくなってしまった。

漢字表記の変更による呼称の変化の実例は豊浦町「大岸」にもみられるので、その語源、語義、呼称変化について記しておく。

(1) 蝦夷語地名解 (1891)⁽⁶⁾

Op kespe shirétu オプケッペシレト° 槍端岬
(槍の石突に似たる岩ある岬)

(2) 北海道地名一覧 (1986)⁽⁵⁾

オプ・ケシ・ウン・ペ=銚の・末端・にある・

もの⇒小銚岸(オフケシ)→大岸(おおぎし)
(3) アイヌ語地名解⁽³⁾、北海道の地名⁽¹⁰⁾

室蘭本線の小駅名「大岸(おおぎし)」は、もとは「小銚岸、負岸」とも書かれて「おふけし」と呼んでいたが、昭和10年、駅名を「大岸」と簡略化したのに伴い、「おおぎし」に呼称変更し、集落名も「大岸」となったが、川名は今でも「小銚岸川」である。

しかし呼称変化は漢字表記の変化がなくても生じることが多く、例えば「月寒」が今では「月寒」に定着したように、漢字表記が原地名の呼称に不適切とみられる場合には、時の経過につれて呼称は変化するようである。もし、「月寒」の表記が「月札布」にでもなっていれば、「ツキサップ」(正しい原地名はチキサップ)の呼称は現存したと思われると同様に、「陸別」の表記が当初から「陸運別」あるいは「利薫別」「利訓別」などであれば、現在「リクベツ」と呼称されることはなく、原地名に近い地名呼称が現存したと考えられる。「古丹別」「初山別」などはその好例である。また、同一地名の多い「ウエンナイ」の漢字表記例として「雨煙内」「植苗」があるが、後者は漢字表記した時点で呼称変化したようである。

6. 古地名「リクンベツ」の語構成

鏡味明克(1984)は「地名の異分析変化」について次のように論じている。⁽¹⁾

「アイヌ語の地名はとくにアイヌ語を正確に解さずに漢字をあてた場合が多く、語構成を無視したあて字をし、その漢字にしたがって発音に変化することから、アイヌ語の原形をはなはだ破壊した。オタ(砂漠)ノシケ(まん中)を大楽毛、シ(大)ベツ(川)を標津(標の古訓を利用)など、さらにソ・ラ・プチ・ベツ(滝の下る川)を空知、オ・ペレペレ・ケブ(川尻がいくつにもさけている所)を帯広などになると語形の短縮も含めて、いちじるしく語形が失われ、漢字に即したよみに変化してしまっている。」

古地名「リクンベツ」の原形は次の2通りとみられる。

(1) リ・クン・ベツ(永田方正説)⁽⁶⁾

(2) リク・ウン・ベツ(知里真志保説)⁽⁴⁾

上記の5に示した表記例をこれに当てれば、(1)

に対しては「利薫(訓)別」, (2)に対しては「陸運別」と表記するのが妥当であろう。従って現形「リク・ベツ」は、原形2)「リク・ウン・ベツ」の「ウン」が省略された形とみることもできる。

7. 「リクベツ」と「リクベツ」の相異

知里真志保(1956)によれば⁴⁾, 地名語「リクン」のアクセントは「ク」にある。これに「ベツ」が結合しても同様に「リクン・ベツ」と発音され、「リクン・ベツ」とは発音されないようである。

現地名「陸別」の場合はどうであろうか。「リク・ベツ」と「リクン・ベツ」の2通りが考えられるが、実際には「リク・ベツ」の方が多いように聞こえる。この「リク・ベツ」と古地名「リクン・ベツ」を聞き比べた場合、両者はそれぞれ異った「ひびき」を持つため、むしろ互いに別個の地名という認識を抱きがちになることは避けられないものと思う。

文字を持たなかった、かつてのアイヌ人は地名を呼称(耳)でのみ区別したことから、地名の発音やアクセントにはかなりデリケートであったものと推察され、同一地名に対して2通りのアクセントやアクセントの転位などは許されなかったであろう。日本語の場合は、これらは暗黙に認められ、また方言などの形で活用され、使い分けされたりして、多少の混乱はあってもそのまま通用するのが常である。

また、「陸別」の同類地名として「幕別」がある。

古地名「マクン・ベツ」(マク・ウン・ベツ=後に・ある・川=)→現地名「マク・ベツ」となったが⁵⁾, この発音も「マク・ベツ」が多いようである。しかし「幕別町」という場合は「マク・ベツ・チョウ」と発音され、この「チョウ」が省略されると「マク・ベツ」となって、これを初めて耳にした人は、英人シェークスピアの戯曲「Mac・béth マク・ベス」をイメージし、「アイヌ語地名」ならぬ「外来地名」の錯覚に陥入りかねないであろう。

なお、地名とは異なるが、官庁名に「陸運局」(現在は行政改革で「運輸局」となった)、「通産局」, 「貯金局」などがあり、これらはいずれも2字目の漢字の発音に「ン」があり、その漢字にアクセントがあるため、「リクン・ベツ」式の発音となっている。

「陸運局」の場合は、やや早口で云うと「リクン・キョク」となって、かつてこれを耳にしたときには直ちに「リクン・ベツ」を思い浮かべて懐しかったのであるが、今やいずれも過去の思い出となってしまった。

8. アイヌ語地名「陸別」の保存

藤島範孝(1971)は「北海道の地名構成」において「アイヌ語地名」を1)音訳, 2)意訳, 3)アイヌ語のまま、に分類し、さらに1)をi)和名として通用, ii)和名として通用せず、に細分している。

これに基けば「陸別」は当初は1)-i)に属していたものが、その後1)-ii)に変化したのではなかろうか。もし、当初から3)であれば、表記も呼称も現在のような変遷をたどることはなかったと考えられる。

鏡味明克(1985)は「アイヌ語地名を守るために」と題して次のようにのべている。⁶⁾

「アイヌ語地名の保存上大切なこととしては、少なくなったカナ書き地名、留萌市ポンルルモツベなどにこれ以上漢字を与えないこと、稚内市ノシャップとか稚内の原名をとどめる字ヤムワッカナイなどを町名として保存し、別名におきかえないこと、難読地名はできるだけかな書き化を促進すること、標津のごとき通常のあて字から逸脱したり語構成の切り方を勝手に変えているものを適切なやさしいあて字に直すこと、月寒→ツキサムのように文字にあわせた読みかえをしないこと、むしろかな書き化を選ぶこと、などが挙げられる。ただし、慣用久しく、有名になっている地名は必ずしも改変を要しない。また文字の修正は語源の明確なものに限られる。正確な原名に復元しえない、語源に異説のある地名もすでに多いのである。」

「^{リクベツ}陸別」が「^{リクベツ}陸別」に変わってからすでに数十年を経過して、全国的にも酷寒地として有名になり、「リクベツ」の呼称はすっかり定着している現状から、現地名「陸別」の改変は要しない。むしろ将来さらに改変されることがあれば、原地名からますます遊離していくことが懸念されるため、これ以上の改変は無用と考える。

今後は上にのべた漢字表記や発音上に問題があ

ることをもっと明確にして、記録にとどめる必要がある。

9. おわりに

本稿の作成にあたり資料の所在等で、駒沢大学北海道教養部の栃木義正先生にご教示いただき、深く感謝いたします。

本稿は、1987年3月24日、北海道地名を愛する会3月例会で発表した内容に加筆したものである。

参考文献

- (1) 鏡味明克 (1984) : 地名学入門, 大修館書店.
- (2) 鏡味明克 (1985) : 地名が語る日本語, 南雲堂.
- (3) 更科源蔵 (1966) : アイヌ語地名解—北海道地名の起源—, みやま書房.
- (4) 知里真志保 (1956) : 地名アイヌ語小辞典, 楡書房.
- (5) 栃木義正 (1986) : 北海道地名一覧
- (6) 永田方正 (1891) : 北海道蝦夷語地名解, 北海道庁.
- (7) 藤島範孝 (1971) : 北海道の地名分類 (1) 和名について, 北海道地理, No. 46.
- (8) 山田秀三 (1982) : アイヌ語地名の研究 (第1巻).
- (9) 山田秀三 (1983) : アイヌ語地名の研究 (第2巻).
- (10) 山田秀三 (1984) : 北海道の地名, 北海道新聞社.